

【H25.1.12 パネルディスカッション抄録】

司会	<p>では、今日発表頂いた方に加えて、ネットワーク宮城代表の阿部さんにも加わって頂いて、パネルディスカッションを始めたいと思います。最初に阿部さんについて皆さんに知ってもらう為に、自己紹介をお願いします。</p>
阿部	<p>阪神淡路や中越地震でのボランティア経験を生かし、震災後すぐに一人で被災地を南から北へ車で回り、被災者に暖かい飲み物と寝床を提供した。被災地の大変な状況を見て全国の仲間にも被災地支援活動に参加してもらおうと3月20日にネットワーク宮城を立ち上げました。そして活動拠点を小泉地区に決めたのは、行政や自衛隊等支援の手が殆ど入っていない地区で何とかしなければという思いからでした。</p> <p>活動で大切にしたのは3点、まずは食。生きて行く為の最低条件は食べることであり、巡回のときもボランティア基地を作った後も食料確保を重視しました。2点目は、子どもの居場所づくり。震災前にやっていた活動が子どもの居場所づくりであり、震災直後は周りの大人が肉親探しや片付け、暮らす場所の確保に忙殺されており、学校も休みといった状況で、子ども達は自分の居場所がありませんでした。子どもには大丈夫といってくれる大人が必要でした。3点目は、「支援に来ました」という上から目線ではなく、被災者の目線に立って行動することを重視しました。現地の人に受け入れられるよう、「支援」の字も「志縁」へと変えました。瓦礫撤去等に目処がついた段階、昨年5月に小泉自然学校を立ち上げ、子ども達に「災害から自分で自分を守る」ということを学ぶ内容の減災キャンプを実施し、今後は地域の再生という復興の第二段階に入ろうとしているところです。</p>
司会	<p>有り難うございました。</p> <p>皆さんの発表からは自然との共生や利他的行為の重要性がありましたが、改めて「震災で学んだこと(実践から得たこと)とは何か」を皆さんにお伺いします。</p>
佐々木	<p>サラリーマンを辞めて自然学校運営に入ったのは、「グローバル経済の中で働くこと」から「自然との共生を軸に行動すること」への転換でした。そこでは、「自給自足的な生活、10人程度の小集団での暮らし」が持続可能な世界には必要という立場でした。ところが今回の震災では、そこから一歩前に出なければいけないの思いに至りました。人々の絆で成り立っている地域が広範に被災しました。被災地支援の第一歩、生き延びることへの支援として、物資を届けたり、瓦礫を片付けたりした後、地域が生き伸びるには、やはり産業、働く場が必要です。それがなければ復興できない。その産業、働く場といった復興の次元で「自然との共生」を実現していくことに関わるが大変重要だと思っています。自然学校と木材屋の出会い、教育と産業／雇用が結びつくことで、社会とより接点を持つ形へ進化したと考えています。</p>
千葉	<p>震災で学んだことは地域の絆の大切さです。今回の地震は地域の交流が豊かなところが被災しました。被害は甚大で、多くの方が亡くなられました。広範な被災地で行政の支援が必ずしも十分には行き渡らない状況でしたが、生き残った人は、地域の絆で、大変な環境を何とか耐え忍んできました。逆に言うと地域の絆がなければ、震災後の生活はもっと大変なものになっていたと恐ろしくなります。地域の絆が失われている都市では、行政の機能が失われる程の被害が発生した場合、本当に恐ろしい状態になると思います。今回の震災でも、地域の絆に入れなかった被災者は情報や支援が不十分で大変に苦労されている。また、避難所では地域の絆に守られていた人が、地域コミュニティーを無視して抽選できる仮設住宅に移ってから、大変苦労されている現状があります。</p> <p>(注)2012年12月31日現在の警察発表「孤独死千人を超える。」</p> <p>死者6434人、家屋全半壊(焼)約47万世帯という被害を出した阪神・淡路大震災(1995年1月17日)から17日で丸18年。約3万9千人の被災者が住む兵庫県内の災害復興公営住宅では、昨年、前年より25人多い61人が孤独死し、累計778人に。孤独死は、仮設住宅の233人と合わせて千人を超えて、1011人に達しました。</p>

<p>小山</p>	<p>「学校は地域に浮かぶ船。」といわれても、以前はピンと来ませんでした。震災によって初めて「ああそうなんだ」とわかりました。学校の使命は子どもを守るだけでなく、避難してくる地域の人も守る存在だということを感じ知らされました。今回の震災の大きさ、それによって失ったものの大きさは計り知れませんが、子ども達の心への影響も大変大きく、そのことを少しでも緩和し、回復に努めることが教育の大きな役割と再認識しました。震災直後、親戚や友人を震災で失った子ども達も、私たちが驚く程元気でした。しかし、それは非日常的空間の中で、いわゆるハイな状態になっていただけで、3ヶ月後には大きな反動がきて、見ているのも可哀想な状態が続きました。そんな中で、カウンセリングも大事ですが、何よりも夢中になって遊ぶことだと思い、遊ばせる環境を如何に用意してやるかが私の仕事でした。</p>
<p>木村</p>	<p>震災から学んだことは、環境教育と防災教育は重なるものだということです。これには、二つの意味があって、環境教育は、省エネ教育も含めて大変幅広い概念として使われていますが、自然体験によって皮膚感覚で自然を体感することがその基本にあるということです。即ち、自然体験教育が自然災害に際して少しでも身を守り、生き伸びる為に役立つということで、ライフラインが途絶えたときの対応も環境教育に含まれると考えています。まさに減災教育と言っても良いと思います。もう一つの意味合いは、防災というキーワードで地域と学校は一体になる必要があるということです。宮城県の防災態勢と教育態勢は大きくは別個の存在であり、今回の震災で被災した地域の現場の感覚とは懸け離れており、また、都市地域に於いても学校と地域の繋がりをこの機に再構築していくことが重要であり、その意味で抜本的に改める必要があると思います。もう一つ震災で学んだことは、復興の過程で平時では出会わないたくさんの人に出会い、皆さんの献身的な行動に多くを学ばせて頂いたことです。「昨今の若者は」と批判的に言われることもありますが、被災地でのボランティア活動では、若者がたくさん参加し、リーダーシップを発揮している逞しい若者にもたくさん出会えました。また、被災地ではたくさんの NPO / 団体が活動していましたが、最初の混乱状態は別にして、お互いの連携、協力体制があればトータルなパフォーマンスをもっと上げることが出来たのではないかと思います。今回の様な機会に連携協力が図ることができればと思っています。また、一次産業従事者が多い地域は普段から協力していることから、支援に入った団体との関係も適切に対応できていたのが印象的でした。</p>
<p>阿部</p>	<p>震災で痛感したのは、「営みと備えは表裏一体であるべき。」という言葉の大切さです。常日頃から災害への備えをすることで、自分で自分の身は守るという意識が出来ます。沿岸部の地域に古くから伝わる「てんでんこに逃げよ。」(勝手気ままに、各人が自分の責任で行動する様)という言い伝えが生きていれば、誰かの指示を待って逃げ遅れることはなかったはず。今回の反省から、小泉自然学校を立ち上げて、子ども達に自然体験の中で、自分の身は自分で守るという「生きる力」を少しでも伸ばしていく、減災教育に取り組み、「てんでんこに逃げよ。」という言い伝えをしっかりと根付かしていこうと取り組んでいます。</p>
<p>司会</p>	<p>皆さん有り難うございました。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1、利他的行為の素晴らしさ 2、自然の脅威を再認識する中で、自然と共生する生き方が大切 3、地域の絆が、震災対応では問われる <p>で共通認識は出来ていると思いますので、次の質問に移りたいと思います。</p> <p>「今震災から二年が過ぎようとしています、最初の質問に答えて頂いた内容は、どう変容していますか？」</p> <p>定着している動きと風化しつつある動きについて聞かせて下さい。</p>

佐々木	<p>1996年中教審で答申された「生きる力」が現実の場面で求められたのが今回の震災だったと思います。どんな環境であろうとも自分で判断し、自分で問題を解決し、自分で行動できるのが「生きる力」。私がやってきた自然学校での冒険教育のキーワードも「生きる力」。そういう意味では、自分のやってきた冒険教育が本物かどうかまさに震災で試されました。震災という最も非日常的な環境の下では、「何がやれるか」、「やったことで被災者にとって良い結果が生まれるのか」誰も保障できませんが、その世界において一步踏み出して被災者の課題を自分の課題として解決し、行動することを実践してきました。コンフォートゾーン(結果が見えている安全／安心な世界)から踏み出し、一つ一つの行動を積み上げて、様々な人との出会いの中で、次に何をするかを掘り下げ、辿り着いたのが「手のひらに太陽の家」でした。この構想が生まれた時点では、資金面は勿論、この家を受け入れてくれる自治体や、利用者の目処も一切ありませんでしたが、この構想が絶対必要だという思いは、震災復興に携わる中で、確信に変わっていきました。震災から二年が経つ中で、震災から生き伸びる段階から、暮らしを立て直すという段階に入り、「生きる力」がより本格的に試される段階になってきている。一人一人が自分の力でコンフォートゾーンを出て暮らしの再建に挑んでいけば、震災からの復興のプロセスをより意味のあるものに変えていけるし、復興自体を早めることが出来ると思います。同時に、これからの教育の在り方も強く問われていくものと考えています。</p>
千葉	<p>震災後二年近くを経過し、子ども達の状況として命の危険はなくなっていますが、心が触まれる危険はこれからまだまだ大変な段階にあると見ています。子ども達と接していても、表面上は何の問題も無いように見えますが、一步踏み込んで話してみると育児虐待や育児放棄に近い状況が潜み、また中高生の中には問題行動を起こす子ども達も増えています。この要因としては、子ども達の親の問題があります。震災直後の混乱状態が一定の落ち着きを見せ始めると、被災者自身も周囲の状況が見え始め、一向に改善しない生活環境に苛立ち、周囲の人との情報格差に悩む中で、子ども達へその捌け口が向かう様なケースも生じています。一方、中高生の子ども達は、労働の担い手としての期待や、親からの愛情の注ぎ方にも一人前の大人扱いされることで、問題を抱えてしまっているケースがあるのではないかと思います。震災直後は大人の私でも夜中にうなされて目が覚める様な状況でしたが、小さい子どもは母親に抱きしめられることでその不安を解消できましたが、中高生は一人で解決を迫られました。また、震災後は手厚い支援が長く続き、ある意味で今は普通に戻ったわけですが、与えられ過ぎたことで、今の状態が普通と思えなくなっているという被災者の意識の問題も子ども達で反映し、子ども達が問題を抱える要因の一つになっていると思います。情報格差の解消や、被災者の状況に合わせたきめ細かなフォローを継続していくことが必要な段階になっていると認識しています。</p>
小山	<p>震災後二年近くを経過し、先生の危機意識は衰えるどころか高まっています。橋浦小学校には三校が同居していますが、各学校とも同様に危機意識は高い状態です。橋浦小学校の例で言いますと、行政から示されている学校の避難訓練のメニュー(地震、火災、不審者の3回)では物足りないのか、年7回やっています。そして訓練の内容もより実践的になっています。例えば、通学路で津波にあったことを想定して児童毎にどの場所ではどこの高台に逃げるのかを決めて、実際に訓練では登らせています。また、高地のない通学路では、どこの建物に支援を求めのかを想定して、建物内の階段だけではなく、避難階段も登らせています。一方で、変わっていない部分は、12月7日 17時18分頃の地震の対応です。車で帰宅途中であった私はすぐに学校に戻ったら、30人の地域住民が避難してこられた。ところが、歩いて3分の総合支所からは誰も来ない。勿論、勤務時間中で人は大勢いたんです。橋浦小学校に誰も人がいない時間帯の対応が二年経っても不明確なままの状態になっていることがわかりました。私は、避難してきた時に誰も学校にいないければ、ガラスを割って入るということを事前に徹底しておくべきだと提案しています。</p>

木村	<p>震災後二年を経過し、</p> <p>1、学校での防災／減災の取組みでは、格差は広がっていると見ています。国の指針は示されているはずですが、やるとなると小山先生が述べられたように地域の実情に合わせた現実的なものを作り上げていく難しさがあります。難しいが故に、国の指針のまま実施して、実効的な避難訓練になっていないというところが大半ではないかと思っています。</p> <p>2、被災地の状況は皆さんもお話しになられたように、震災直後の頑張るぞーという気持ちが二年間何も復興が進まない状況の中で元気を失っている地域が出てきています。思い切った手を打たないと折角震災を生き延びたにもかかわらず、地域崩壊に至ってしまうのではないかと心配な状況です。</p> <p>3、企業の行動では、会社のロゴを背負って瓦礫の撤去に汗を流す社員がたくさん出てきた。そして、そういった経験をした社員の方が本社 CSR 部門で働いている事例をたくさん目にしました。今回の震災を契機に見かけだけでなく、真の CSR とは何かを真剣に考える企業が出てきており、今後に期待したいと思っています。</p> <p>4、被災地域で支援活動を展開する団体の中で、震災ボランティアを継続する、阿部さんがそうですが次の震災に備える為の減災教育に取り組む、まちづくり計画に参画する、震災対応から地域づくりに進む等、住み分けが徐々に出来てきた感があります。</p> <p>5、行政は縦割り、古い制度からなかなか抜け出せていないと思います。一例を挙げると宮城県は、震災直前に環境税を導入し、水源涵養や景観などの観点での森の整備や森林環境教育も考えていましたが、震災発生後は LED 転換等の省エネ促進に使っています。震災後大きく期待されている「自然とふれあい、自然から学ぶ」ことが、「環境教育」とは言いながら教室から外に出ることもない省エネ教育になっています。</p> <p>このようなシンポジウムで議論を深め、震災復興での森林環境教育の重要性を広く訴えていきたいと思っています。</p>
阿部	<p>震災後二年を経過し、その間の変化を一言で言えば人の気持ちの変化だと思っています。被災者も被災地を訪れる方にも変化が出ています。ボランティア活動で被災地に入る人も、震災直後は体力のある若者が最前線にたって瓦礫撤去等を担いましたが、今は、被災地を見ておきたいという気持ちでボランティアに加わる中高齢者の方や家族連れの方が出てくるようになっていきます。</p> <p>一方で、復興が実施段階に入るに従い、利権が発生したり、被災者の間に格差が発生したりと、地域を分断する様な動きも出ているのは残念な状況です。そんな中で前向きな動きに着目すると、地域住民主体の本吉復興エコツーリズム推進協議会が立ち上がり、暮らしの再建、地域おこしの動きが出始めています。私は震災後からボランティア活動を続けてきましたが、今後はこういった地域起こしの動きが成功するように、更に継続して関わってこうと考えています。皆さんも是非応援の意味も込めて、小泉、本吉に来て下さい。</p>
司会	<p>皆さんありがとうございます。現場で活動を続けてきた皆さんだから言える臨場感溢れる貴重なお話を頂きました。震災が風化している問題もありますが、震災で学んだことをしっかり根付かせていく取組みが重要だと再認識しました。そこで、</p> <p>「子ども達への働きかけを如何に進めていくか 学校教育での実践の隘路と解決策の模索、様々な団体との協業 学校教育以外の取組みへの広がりを持続可能な仕組み」 について皆さんのお考えを伺います。</p> <p>まず、小山先生にお伺いします。今回の学校の森のアンケート結果をみると取組まれている宮城県内の学校は、全国同様少数派でした。普通の学校にとっては森の活用のハードルは高いように見えますが、橋浦小学校の取組みをもっと広げていくために必要なことについてお考えをお聞かせください。</p>

小山	<p>一言で言えば先生の「思い」があれば突破できないことはないと思っています。私は、橋浦小学校に来る前は角田市で教頭をやっていました。当時も地震対策が問題になっていました。校舎の耐震化が全く出来ていない中で、如何に早く逃げるかという避難訓練を充実させてきた経験がありました。橋浦小学校に赴任してもっと防災の対応が出来ていない状況でした。そこで、教室内の本棚などにL字の金具を補強し、通学路に危険物がないかの点検を率先して行いました。もう一つは、子どもの遊ぶ場づくりにも取り組み、理科教育の中でビオトープをつくり、その次は裏山の整備が出来ないかと言う風に、段階を追いながら実践し、結果を出すことによって、周囲の先生の意識が変わり、皆が「思い」を持つに至りました。そうなれば、裏山の整備では大きな障害がありましたが、先ほども申し上げたように、多くの助っ人が現れて、そのハードルを乗り越えることができました。「思い」があれば、周囲の協力も得られるのではないかと思います。木村さんのお話しの通り、「思い」さえあれば、雑草を残しておいて観察することも出来るし、校庭の片隅でも、斜面でも学校の森は出来ると思います。</p> <p>学校に外部の人を入れる、ボランティア活動を受け入れることはある種のかげだと思えます。私は震災復興の中でしかこんなたくさんの人と巡り会えるチャンスはないと前向きに捉えて、きっと子ども達にも良い経験になると信じて受け入れました。実際に普段の橋浦小学校の生活からは得られない、いろんな人との繋がりを子ども達が学んだと思います。大人って面白いなって子ども達は感じ、ちょっと行儀は悪いかもしれませんが、大人に心を開き、子ども達と外部の人々との間に良い交流が生まれており、私は大成功だと思っています。</p>
司会	木村さんは橋浦小学校で活動されていますがどうですか？
木村	<p>小山先生の言う通り、橋浦小学校にいる子ども達は元気ですよ。大人に対しても遠慮せずに素直に行動できる。これは橋浦小学校では子ども達が自由に行動できる環境が提供されていることの証左で素晴らしいと思います。さて、学校での森の活用にはハードルがあると言われましたが、全ての学校に森は作れます。私が保障します。大人の目線で考えれば、校庭には森なんてないし、出来ませんよというかもしれませんが。子どもの目線になれば雑草だって自然を教えてくれる貴重な存在です。湿潤な気候の日本では色んな植物が勝手に生えてくる土地柄です。校庭の雑草を一本残らずとってしまうのではなく、校庭の一角に腐葉土を入れ、ちょっとすれば、色んな草がでてきますし、木まで生えてきます。その一角はもう立派な学校の森です。やろうとさえ思えば出来ないことはないと思います。</p>
司会	確かに、森がないとって最初から諦めるのではなく、子どもの目線に立って、自然と付き合うことを考えれば、簡単にブレイクスルーできるというお話は目から鱗ですね。ところで、小山先生のところでは、年間何時間くらいの授業時間を森の活動に充てられているのですか？
小山	こんなことを言うと怒られるかもしれませんが、予め計画されている時間よりも不定期にどんどん森に入っているのです。正確な時間は把握していません。むしろ、どんどん何時でも森に入って良いよと皆を焚き付けています。
司会	愚問で失礼しました。まさに「生きる力」に必要な子ども達の自立を大切にすることを実践されているんですね。学校現場に一番近いところで活動されている千葉さん如何ですか？
千葉	昔は、学校から帰れば小山先生や木村さんの様なガキ大将がいましたよね。皆で遊ぶ中で、危険なところはどこかとか、危険なところで遊ぶ時に皆でちゃんと行動しようとか、自然の中で生きることや生活の知恵をたくさん学ぶことが出来ました。今はその部分が失われているのではないのでしょうか？学校だけでカバーするのは難しいので、PTA や地域の人々とも連携しながら、そういう役割を何とか再生していく必要がある、その意味で「学校の森」の意味合いは大きく、子ども達の居場所づくりにも関わってくると思います。
司会	小山先生の話も千葉さんの話も授業としての学校教育だけでは、はみ出る部分の大切さがあったと思えます。この点、学校教育以外の場で教育を行っておられる佐々木さん如何でしょうか？

佐々木	<p>自然学校と学校の違いは何か。野中先生の知的創造企業という形式知、暗黙知にならって言えば、学校教育は概念学習法が中心でいわゆる形式知を主として学ぶ＝覚える場になっている。試験で成績が出るのはこの世界ですね。一方、自然学校は暗黙知を学ぶことが中心で、暗黙知は体験からしか身に付かない。正解を覚える世界ではなく、自分で考えることでしか身に付かない。教えることではなく、考える力を引き出すことが重要で、考える時間を増やす。小山先生がやられていることはまさにこのことで、自分自身で考える時間をもうけられている。生きる力はこの取組みの中で体験として身につくことだと思います。「生きる力」を標榜する限り、学校教育でも体験型の学習が絶対に必要であると思います。</p>
司会	<p>佐々木さんが言われるように、「学校の森」での活動を通じて子ども達が「生きる力」を自ら学んでいくという意味で、自然学校と学校教育が同じ次元に立つ訳ですね。</p> <p>さて、ここで、皆さんにお配りしている「学校での森の活用状況アンケート結果」を簡単に紹介しておきます。学校教育での森の活用は極めて少ないといえます。その中で、5校が活用を検討しているというのは小さくない数字と言えます。また、震災後に活用開始した学校、防災、減災プログラムを採用している学校、震災後の子ども達の心のケア等震災を意識した森活用の意義を重視している学校等、震災を契機にした森の活用への意識の変化は14校に及んでおり、絶対数は小さいながら、一つの動きになっているといえます。</p> <p>また、実施に当たっては、①近隣でのフィールド、②指導者（森林整備や授業のサポート）、③PTA の理解がポイントとなっていることが伺えます。</p> <p>ここで、横山校長先生(※)にアンケートを見ての感想を聞かせて頂けたらと思います。</p> <p>(※)学校林の活用について出展いただいた松陵西小学校の校長先生</p>
横山	<p>平成15年から活用が始まっており、松陵西といえばケヤキ山というぐらい PTA の皆さんにも活動は浸透しています。抵抗勢力ではなく、強力なサポーターになっています。やはり子ども達がケヤキ山の活動を楽しんでいる、だから、家に帰っても両親にその楽しさを伝えているので、両親も理解があるということではないでしょうか？PTA 向けの学校評価のアンケート結果も「ケヤキ山はずっと続けて欲しい」というものです。</p>
司会	<p>横山校長先生有り難うございました。スタートを切る迄のハードルが大きい訳ですから、松陵西小学校や橋浦小学校、東根小学校のような実践事例を丁寧に紹介して行くことが大切ではないかと思います。</p> <p>今日は限られた時間でしたが、被災地で復興に取り組まれている皆さん方から、森と子ども達の良い関係ということをテーマに沢山の貴重なお話を伺えました。この辺でパネルディスカッションはお開きにさせていただきます。パネラーの皆様にもう一度盛大な拍手で終わりたいと思います。皆様有り難うございました。</p>